

## 第5節 横穴墓の天井形態について

大谷横穴群で今回調査された横穴墓 30 基の内、小型横穴墓とミニ横穴墓を除いた 25 基の横穴墓の天井形態を調べると、非常に多様性を帯びている。本節では、一横穴群内でのこうした横穴墓の天井形態の多様性について、若干の検討をするものである。各横穴墓の天井形態については、本書第3章第1節の「遺構の概観」や本書 23 頁の「大谷横穴群横穴墓計測値一覧表」を参照されたい。

なお、文章中で参考とした文献類についてはできるだけ註にしたが、発掘調査報告書等については本報告書末の参考文献を参照していただきたい。

さて、本横穴群はドーム型が優位にあり、尖頭アーチ型がそれに続く。このことは、単一の天井形態だけで横穴群を形成するものではないことを確認することができる。また、天井形態が違っていても、横穴墓の規模や副葬品からは特に際立った相違をみつけることはできない。むしろ天井形態の一つだけを除いた均質性が特徴的でさえある。

静岡県内の横穴群にはそれぞれ個性があって、それを大局的に捉えてみると、横穴墓の多様性となる。横穴墓の天井形態についても多様性がみられ、そこに地域性があることが従来から指摘されている。

こうした天井形態の違いについては、さまざまな見解が提示されているが、大きく分けるとそれは年代差と地域差とに大別することが可能であろう。年代差の場合は、横穴墓の基本形態が退化していく推移の中で、形態に多様性が生じたとする考えである。具体的には、袖部が退化して玄室と羨道部の区別がなくなることや、玄室規模の小型化によって、最終的に筒型構造の横穴墓へと推移していくものであるとされる。あるいは、明瞭な袖部と明確な尖頭アーチ型を有するものから、袖部が形骸化し、鈍い尖頭アーチ型に、そして最終的に袖部を形成しないフラスコ型でドーム型に近い形態へと推移していくものとも考えられている。もっとも、それぞれの横穴群の中には、最初の段階ですでに多様性を内包していたとする考えもある(註 1)。

次に地域差の場合、流域ごとと地区ごととで、地域差を明確にすることができる。この場合の地区ごととは、第4章第1節「掛川市域の横穴群の動向」で分けた 13 グループの分類がこの地区に相当する。まずは、流域ごとの地域差の様相を確認してみる。

大田川・原野谷川流域沿いの横穴群の場合、玄室の平面形は縦長の長方形の「妻入り」を呈し、玄室の横断面は二等辺三角形に近い尖頭アーチ型が主流である。逆川流域の横穴群に関係すると思われるドーム型の横穴墓も若干確認できているが、それらはいずれも小型横穴墓である。

原野谷川中流域・逆川流域沿いの横穴群の場合、縦長の長方形で尖頭アーチ型もしくはアーチ型を基本とするのは、大田川・原野谷川流域の横穴群と変わらない。しかし、時期が下ると、縦長の長方形でアーチ型のものが比較的多くなるとともに、横長の長方形でアーチ型の形態とその系譜をひく横穴墓が群中で小数存在するとされる。ただし、この場合は小規模な横穴群に限られるそうである(註 2)。また、一部で、菊川流域系の横穴墓が点在している状況は注目される。

逆川流域沿いの横穴群の場合、南部の横穴群において、菊川流域で優位を占めるドーム型がみられ、掛川市三十八坪横穴群 A 群が現在のところ、このドーム型横穴墓の北限とされている。これより北側に展開する横穴群は、全て尖頭アーチ型を有する横穴墓である。したがって、大田川流域においては、菊川流域系の横穴墓は今のところ全く確認されていない。なお、菊川流域にみられる袋状形態の横穴墓の影響で出現したと思われる胴張りの正方形に近い玄室形態で、天井が低い扁平な印象を受けるドーム型の横穴墓がわずかに存在するが、この系譜は、逆川水系からの影響で成立したとも考えられている(註 3)。

菊川流域沿いの横穴群の場合、玄室断面がドーム型を呈するものが主流である。具体的には、玄室平

面形が横に広く、羨道は広い面に取りついているいわゆる「平入り」の形態を示す横穴墓が圧倒的に多い(註4)。それに続くのが、フラスコ状玄室形態の横穴墓である。なお、ドーム型の場合、極端に扁平なタイプと、やや天井の高いタイプとに分かれるとされる。下流域の大東町や小笠町などに分布する横穴群も似たようなものが多数存在する。

県中部に目を転じて、伊庄谷横穴群の各横穴墓の形態についてみると、玄室の平面プランは長方形で、妻入りの形をとるものがほとんどである。横断面形は尖頭アーチ型が主流となる。しかも他の横穴群に比較すると、きわめて統一的であるとされている。

北伊豆の狩野川流域沿いの横穴群の場合、玄室と墓前域とからなっており、羨道部が認められない横穴墓が非常に多い。こうした羨道部を設けないか、あるいはきわめて微弱な痕跡を残すにすぎない横穴墓は、当地域ではかなり一般的であるとされる。

以上、静岡県内の横穴群の天井形態には、河川流域沿いごとに限定された地域性があることが確認できた。このような地域性は、それぞれの地域における特徴の一表現であり、その横穴群の築造集団の社会的位置を教えてくれるのである。それでは、このような地域性は何に由来するものであろうか。今このことを解明することは、非常に困難ではあるが、地域性の中には明らかに他地域からの影響を受けて成立した特色が含まれていることから、そこに横穴墓を墓制とする複数の外来系集団の存在を考えるとできるし、あるいは、横穴墓築造集団の互いの人的交流を考えることもできる。また、類型化した横穴墓が地域を越えて広く分布していることから、そこに律令国家成立期の遠江国における、群域設定との関連を想定する考えもある(註5)。

一方、地区ごとの地域性について考えてみる。このことを考えるにあたっては、大谷横穴群の天井形態の多様性を手がかりとしたい。そこで、本横穴群と同じように、いくつかの天井形態をもった横穴墓で構成されている横穴群、中でも尖頭アーチ型とドーム型とが混在している横穴群について、掛川市域とその近辺に限定して探してみる。

岡津横穴墳A群・B群にはアーチ型が優勢な中であって、やや扁平なドーム型の横穴墓がA群の8基中2基に、B群でも16基中に6基が採用されている。なお、ドーム型横穴墓と2基で単位群を構成するとみなされている尖頭アーチ型は、B群に1基含まれているが、天井崩壊によりあくまでも推定形態である。本村横穴墳A群・B群にはアーチ型が優位であるが、天井が極端に低い扁平なドーム型の横穴墓があり、B群の7基中1基がこの形態を採用し、その他に、天井中心部の高い山型のものが2基含まれている。尖頭アーチ型の横穴墓は無い。土橋横穴群8基の場合は、アーチ型が主流を占める中であって、ドーム型が1基、尖頭アーチ型2基を含んでいる。尖頭アーチ型の尖頭形はやや退化しているものと思われる。尖頭アーチ型の横穴墓は、1基が単独であり、もう1基はアーチ型横穴墓との2基で単位群を構成している。大谷横穴群から直線距離にしてわずか3kmほどの所に位置する茶屋辻横穴群は、18基のうち、尖頭アーチ型が7基、ドーム型が12基である。しかも注目すべきことに、両者の違いは横穴墓とそれぞれの墓前域の共有形態とで厳密に区分できるのである。斜面の中段に占地し、墓前域を共有しあう横穴墓は、尖頭アーチ型に限られている。一方、斜面の上段に占地し、1基ずつ単独の墓前域(墓道)を有する横穴墓は、ドーム型に限られているのである。両者の先後関係は、尖頭アーチ型が7世紀の築造であるのに対して、ドーム型は6世紀半ば～後半に築かれたものであるとされている。大谷横穴群に近接する横穴群であるだけに、両者の近似性や相反する点を中心に慎重に考えなければならないが、現時点では概報のみであってその詳細は分からない。また、森町観音堂横穴古墳群では、各種の形態が同時に採用されているとされている。23基の内、天井形態の明確な14基の内訳は、尖頭アーチ型が11基、ドーム型が2基、アーチ型が1基である。しかし、尖頭アーチ型の中には尖頭形の退化したいわゆる花卉型も含まれている。なお、ドーム型2基はいずれも天井部が完全に崩壊しているので、

形態の見直しが必要と思われる。アーチ型1基は、玄室の両側壁が尖頭型という極めてまれな天井形態である。なお、尖頭アーチ型であっても、アーチ型の姿形がしっかり保持されているものと、尖頭部分が丸みを呈し、むしろ花卉型（『観音堂横穴古墳群』では、両側壁が緩やかな曲線を描いて「ふくらみ」をもつスタイルを花卉型と呼ぶ）（註6）といったほうが適切なほど、その姿形は明らかに退化しているものがある。一般に玄室規模の縮小化とともに、天井高も低くなる傾向がある。そこから、天井の低い横長の尖頭アーチ型が出現するのであって、あるいは尖頭アーチ型にならないでドーム型に変化していくという、尖頭アーチ型の退化現象を遠江の横穴群で確認することができるであろう。

全面調査の行われた横穴群が少ないので、尖頭アーチ型とドーム型とが混在している横穴群は僅少である。この中で、茶屋辻横穴群のように、尖頭アーチ型とドーム型とが混在している横穴群はあっても、大谷横穴群のように両形態が一つの単位群の中で混在している例は、一つも無い。大谷横穴群には、尖頭アーチ型が8基あり、7単位群で確認することができる。そのうち両形態が混在する単位群は、b・g・j・l・mの計5単位群であり、残りの2単位群は、1基単独で尖頭アーチ型を有する横穴墓である。また、b単位群は3基の内尖頭アーチ型が2基で、残る1基はミニ横穴墓である。m単位群は2基の内1基は、天井形態が不明である。よって、この2単位群を除外したとしても、g・j・lの3つの単位群で、尖頭アーチ型とドーム型を有する横穴墓が混在しあっているのである。しかも、この3つの単位群で共通していることは、尖頭アーチ型の横穴墓は単位群の中でも後出で築造されていること、単位群の中で最初に築かれた横穴墓の天井形態は、あくまでもドーム型であるということである。『掛川市史』では、横穴墓の天井形態の多様性について、「大きな流れとしては、ドーム型・アーチ型から尖頭アーチ型へと推移し、墓前域が用意される段階にはさまざまな形に変移するようになったのである。」とされている（註7）。早い時期に展開されたとする茶屋辻横穴群は、墓前域内での天井形態の多様化は認められていない。したがって「さまざまな形に変移する」と一括することはできないのであるが、大谷横穴群にあっては、この見解に沿うものであることを確認できた。それでは、このような多様化現象は何に起因するのであるだろうか。同一丘陵の限定された範囲に、より上位集団によって墓域が設定され、横穴群が形成されていたとしても、その築造される支群ごとでまたは単位群ごとで、その背後にある築造集団が異なっているとの見解がある。あるいは、外部からの別の形態の移入が考えられる。これは、築造集団間の姻戚関係のような対外的な交流や移動によってもたらされたものであり、同一横穴群内での形態差の違いは、出自の違いの表出ではないかとの見解である（註8）。さらに、そこに横穴群の造営主体による造墓の伝統の差が反映しているのではないかと、この見解も提示されている（註9）。このように、現段階では地区ごとの地域性が何に基づくものであるかを断定することはできない。

単一の天井形態の横穴墓だけでは構成されない横穴群が存在する一方で、その逆に、極めて統一的なプランの下に構成されている横穴群もみられることは注意しなければならない。静岡市伊庄谷横穴群や伊豆長岡町大北横穴群の場合がそれである。そこに、横穴墓を築造するにあたっての規制があったからなのか、それとも単に、横穴群の造営期間が短期間であったからなのか、今のところ判明していない。

いずれにしても、玄室平面形が縦長の長方形でアーチ型あるいは尖頭アーチ型の天井を有する横穴墓（いわゆる「妻入り」）が優勢である掛川市域の横穴群に対し、菊川流域では、玄室平面形が横長の隅丸長方形でドーム型の天井を有する横穴墓（いわゆる「平入り」）が主流を占めている状況が確認できた。そしてこの状況を踏まえると、菊川流域の横穴墓に多くみられる組合せ式箱式石棺が本横穴群からは一つも検出されなかった等の問題点を含むものではあるが、天井形態に関しては、大谷横穴群は独自の地域色の薄い、あるいは両地域の特色の二つを兼ね備えた横穴群として位置づけることができる。それは同時に、一つの地区内にあっても周縁に位置する横穴群における一特性を表示するものとして考慮しなければならないであろう。

註

- (1) 『池ヶ谷横穴群発掘調査報告書』 11 頁 1984 年 小笠町教育委員会
- (2) 『八幡山横穴群－袋井の群集墳と横穴群を考える(2)－』(袋井市考古資料集 第3集) 55 頁  
1997 年 袋井市教育委員会
- (3) 註(2)に同じ 55 頁
- (4) 『遠江の横穴群(静岡県内横穴群分布調査報告書Ⅰ)本文編』 79 頁 1983 年 静岡県教育委員会
- (5) 『平尾野添横穴群－平成2・3年度菊川内田住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』(静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第37集) 9 頁 1992 年 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所あるいは、『観音堂横穴古墳群発掘調査報告書 研究報告第2集』 6 頁 1979 年 日本楽器製造株式会社
- (6) 『観音堂横穴古墳群発掘調査報告書 研究報告第2集』 15 頁 1979 年 日本楽器製造株式会社
- (7) 『掛川市史 上巻』 216 頁 1997 年 掛川市
- (8) 『土橋横穴群・長沢遺跡発掘調査報告書』 66 頁 1991 年 掛川市教育委員会
- (9) 註(4)に同じ 79 頁